

# 演題「浮世絵から歴代市川團十郎の特徴と日本の伝統芸能を垣間見る」

令和元年五月四日

横浜歴史研究会

中村康男

## △ 日本の伝統芸能とは

日本伝統芸能は、日本に古くからあった芸術と技能の汎称。

伝統芸能の分類わけは、いくつかの見解がありますが、ここでは大きく分けて、下記の4つとする。

(和歌や俳句などの詩歌と茶道や華道などの芸道が加わる見解がある。)

### (1) 演劇

・歌舞伎 歌＝音楽、舞＝舞踊、伎＝演技。演出の集大成の総合芸術で、大衆向けのエンターテインメント。

歌舞伎の二つの演目

義太夫狂言－はじめ人間浄瑠璃の為に書かれ、歌舞伎化した作品

義太夫狂言の三大名作は、「仮名手本忠臣蔵」、「菅原伝授手習鑑」、「義経千本桜」。

純歌舞伎狂言－はじめから歌舞伎のための作品

・能楽 能と狂言とを包含する総称。

能は猿楽から発展した歌舞劇で、お面を使った古典を題材にした劇。「～にて候」という文語調。

狂言は猿楽の滑稽味を洗練させ、コミカルな動きが特徴のお笑い劇。「～でござる」という口語調。

・文楽＝人形浄瑠璃文楽。浄瑠璃太夫、三味線、人形使いの三者で成立。

### (2) 音楽

・雅楽 日本古来の音楽と雅楽と平安時代に作られた歌曲の総称。

・浄瑠璃節 三味線を用いる音楽が多い。義太夫節・清元節・常磐津節など。

・唄 長唄・小唄・民謡・都都逸・端唄など。

### (3) 舞踊

・舞楽 大陸から伝来した舞とその伴奏音楽。

・日本舞踊 江戸文化で育まれた<踊り>と上方で継承されてきた<舞>。

### (4) 演芸

・落語 町民の生活や御伽草子などを滑稽な話しとして語るもので、噺の結末に落ち。

・講談 釈台の前に座り、張り扇を叩いて調子を取り軍事物など歴史物を読む。

・浪曲 浪花節とも言い、三味線を伴奏に用いて物語を語る。

日本で最初にユネスコの無形文化遺産に登録されたのが、「歌舞伎」「能楽」「人形浄瑠璃文楽」

歴代市川團十郎を調べると、色々と数奇なことや謎めいたこともあり、興味深い真相は闇の中が多く、ここでは市川團十郎家のお家芸である「歌舞伎十八番」について触れてみたい。

『広辞苑第六版』によれば、「おはこ」とは、「①最も得意とするもの。得意の芸。②転じて、その人の癖。」のことをいう。語源について、同書では「箱に入れて大切に保存する意から。歌舞伎十八番を市川家が秘蔵芸としたことから「十八番」とも当てて書く」とある。』

「歌舞伎の十八番(おはこ)」は、「市川團十郎家代々の役者が得意にしてきた十八の芸」と七代目が制定した。

十八は仏教で縁起の良い数字からつけた。十八の数字が先にあり、十八の作品を選定した。

蛇足ですが、私の高座名「浮世亭寿八(じゅはち)」は、「浮世絵好きで、浮世亭。寿八の誕生日は一月八日で、18のじゅうはち(じゅはち)、八は末広がり縁起がいい、算用数字8、横にすると∞＝無限となる。寿を頭につけ無限を逆さにすると、落語で一番有名な演目「寿限無」となる。ない知恵絞っての駄洒落である。

## △歴代市川團十郎の特徴

	特徴	歌舞伎界	世相 *将軍(在位)	演芸の歩み
初代市川團十郎 万治3(1660)～ 元禄17(1704) 成田に住む父・ 堀越重蔵は侠客。 1675年襲名	歌舞伎界の宗家は市川家だけ、初代團十郎はその市川家の祖。 「荒事」芸を導入。成田山に縁があり「成田屋！」屋号誕生。 役者生島半六の暗殺により死去。	かぶき踊り→女歌舞伎→若衆歌舞伎→ ＜野郎歌舞伎＞ 歌舞伎の一つの完成期。 舞踊より演劇を重視。 初代團十郎が江戸で荒々しさを誇張して演じる「荒事」芸。 初代坂田藤十郎が上方で柔らかく優美な演技の「和事」芸。	第五代将軍綱吉(1680～1709) 元禄時代(1688～1704)、上方の商人が担い手となり、華麗で人間味を重視した文化“元禄文化”が開花した。 初代團十郎はじめ、松尾芭蕉・井原西鶴・近松門左衛門・菱川師宣・尾形光琳らが活躍した。	*落語一元禄の頃、「落とし噺」。 京都で露の五郎兵衛、大阪では米沢彦八が辻噺、江戸では大阪出身の鹿野武左衛門が座敷噺で人気。
二代目團十郎 元禄元(1688)～ 宝暦8(1758) 初代團十郎の成田山新勝寺への祈願で誕生。 1704年襲名	「千両役者」と言われた名優。 市川團十郎家を確立。 『外郎売り』を得意とした。	二代目から四代目團十郎が活躍した享保年間から宝暦年間(1716～1764)は、近松門左衛門作の人形浄瑠璃の全盛期。 二代目は、團十郎家のお家芸である歌舞伎十八番の初演、荒事と和事との融和、人形浄瑠璃の人形の代わりに人間が演じる義太夫狂言を上演など活躍した。	第八代将軍吉宗(1716～45)。 享保年間(1716～36年)の幕府財政の再建の為に質素儉約政策である「享保の改革」の実行。 大岡越前守・大岡忠相が三南町奉行として江戸の市中行政に貢献。 第九代将軍家重(1745～60)・第十代将軍家治(1760～86)。	*講談一戦国時代に軍記を読んだ赤松法印が講釈師の祖。 小屋を設けての辻講釈は享保期に靈全や深井志道軒が浅草寺境内で人気。
三代目團十郎 享保6(1721)～ 寛保2(1742) 二代目の養子。 1735年襲名	七歳で『外郎売り』を演じ、将来を嘱望されたが、旅先の大阪で発病し、翌年22歳で病死。	歌舞伎の劇場の変化、屋根付芝居小屋・花道・宙乗りなどの登場。 初代中村富十郎による女方の所作事の完成。	老中田沼意次の景気回復の重商主義政策により江戸の武士や上層町人は恩恵を享受した。	
四代目團十郎 正徳元(1711)～ 安永7(1778) 二代目(実子とも)の養子。 1754年襲名	実悪の役柄で、「木場の親玉」と呼ばれた名優。 二代目とは、顔立ち・体型・芸質は似ていなかった。			
五代目團十郎 寛保元(1741)～ 文化3(1806) 四代目の子。 1770年襲名	江戸歌舞伎最高の人気役者。 大らかな芸風、洒脱な人柄、様々な役を見事に演じる新しいタイプの役者。	天明・寛政年間(1781～1801)は、五代目團十郎が作り上げた江戸歌舞伎の黄金時代。 文化の中心が上方から江戸に移り、歌舞伎や浮世絵など江戸の庶民文化が開花した。	第十代将軍家治後半・第十一代将軍家斉(1787～1837)。 田沼意次の罷免後、老中上座の松平定信が緊縮財政・風紀取締りなどの「寛政の改革」(1787～1793)を実行したが、定信の失脚によって失敗した。	*落語一天明年間から寛政年間頃、江戸に再び落語ブームが到来。初代烏亭焉馬が新作落とし噺の会を主宰して人気。 初代三笑亭可楽が、初めて興行として寄席の開催、江戸の職業落語家の元祖。
六代目團十郎 安永7(1778)～ 寛政11(1799)	華のある美男役者。 『助六』の演技が	名優と謳われた初代中村仲蔵や四代目岩井半四郎		

1791年襲名 五代目の子。	高く評価されたが 風邪をこじらせ 22 歳で急死。	らが活躍した。		
七代目團十郎 寛政3(1791)～ 安政6(1859) 五代目の外孫で 六代目の養子。 1800年襲名	多芸に秀で、「歌舞 伎十八番」を制定 するなど突出した 力を発揮した市川 家の中興の祖。 一方、天保の改革 のあおりで江戸追 放、六代目の早死 による九歳で七代 目襲名、継承した 八代目の自殺と、 波乱万丈の人生だ った。	七代目が活躍した文化文 政時代(1804～30)は、江 戸の文化の爛熟期。 「東海道四谷怪談」など 奇抜な趣向や当時の庶民 生活のリアルな描写が特 徴の生世話物の脚本を出 した鶴屋南北の活躍で、 歌舞伎の人気復活。 三代目中村歌右衛門や三 代目坂東三津五郎など による「変化舞踊」が流行 した。五代目松本幸四郎、 三代目尾上菊五郎、五代 目岩井半四郎も人気。 しかし、儉約令と風俗取 り締まりを掲げる老中水 野忠邦の天保の改革によ り、庶民の娯楽の代表で あった歌舞伎を取締りの 対象になった。	第十一代将軍家斉・第 十二代将軍家慶(1837 ～53)。 将軍家斉が文化文政期 (1804～1830)及び家 慶に将軍を譲った後も 大御所として実権を掌 握。当時の生活は商品 経済の発展により豪華 放恣となって空前の繁 栄、一方幕府や諸藩の 財政は窮乏。老中水野 忠邦が「天保の改革」 (1841～1843)に着手 するが、諸大名や町人・ 農民の反対にあって失 脚した。 “化政文化”は江戸を中 心に色々な町人が参加 できる大衆文化が開花 し、多くの有能な文化 人を輩出・活躍した。	*落語—文化文政期 は、落語は隆盛。 芝居噺の初代三遊亭 圓生、音曲噺の初代 船遊亭扇橋、怪談話 の初代林家正蔵が人 気。 圓蔵が、1841年に二 代目圓生を襲名、名 跡争うに敗れた圓太 が初代古今亭志ん生 に。 *講談—江戸後期に 入、講釈も話芸とし ての形を整え、大衆 に定着、伊東燕晋、 桃林亭東玉、東流斎 馬琴ら人気講釈師が 登場した。
八代目團十郎 文政6(1823)～ 嘉永7(1854) 1832年襲名 32歳に割腹自 殺。	面長の美貌で、愛 嬌のあるイケメン で「江戸時代きっ てのモテ男」二枚 目役者。 八代目の死因には 諸説あり、幕末と いう過酷な時代背 景が原因とも。			
九代目團十郎 天保9(1838)～ 明治36(1903) 七代目の五男。 1874年襲名	不世出の名優で、 歌舞伎の近代化の 功労者。 従来の荒唐無稽を 排した活歴を始め たが失敗し、古典 的作品に回帰し、 新解釈で演じる。 日本の文化を代表 する高尚な芸術の 域まで高める演劇 改良運動に尽力。 新歌舞伎十八番の 制定・法人の創設・ 天覧劇の実現・銀 座・歌舞伎座の設 立などの功績。	幕末・明治維新时期は、日本は大きな転換期を迎え、歌舞伎も幕府の厳しい弾圧による大きな危機に直面。 新政府の有力者・華族・新興財閥による能楽社や芝能楽堂の設立。 政府の思惑と一致した九代目團十郎の演劇改良運動と、十二代目守田勘弥の劇場改革と共同により歌舞伎界の近代化が推進された。 天覧劇の実現、銀座・歌舞伎座の設立など歌舞伎の地位が飛躍的に向上。	第十四代将軍家茂 (1858～1866)・第十五 代将軍慶喜(1867～ 68)。 幕府を滅亡に導く要因 となる「天保の改革」の 失敗で、薩摩・長州の両 藩が主役となる倒幕、 明治維新へ。 明治新政府は、殖産興 業による産業育成、国 土計画によるインフラ 整備、憲法制定や内閣・ 議会制度の確立と「統 治できる国家」作りに 邁進するなど欧米諸国 を模範とした日本の近	*落語—二代目圓生 門下の初代三遊亭圓 朝(1839～1900)の名 作の創作により近代 落語発展に貢献。 明治2年頃に三代目 圓生、明治15年に四 代目圓生が襲名。 *講談—幕末から明 治半ばが満員大入り 続く講談の全盛期。 講談中興の祖二代目 松林伯圓や三代目一 龍斎貞山が活躍。

			代化を推進した。	
十代目團十郎 明治 15(1882)~ 昭和 31(1956) 九代目の長女の 婿養子。 1956 年没後の 襲名	堀越福三郎、五代 目市川三升して活 躍。 それまで埋もれて いた歌舞伎十八番 の数々を復活上 演。 三升の告別式の日 に養子の海老蔵 (十一代目團十郎) が養父の三升到十 代目の團十郎の名 前を追贈。 十代目で九代目ま では血が繋がって いた血縁による名 跡の継承は途切れ た。	明治から大正にかけて、 坪内逍遙・岡本綺堂・真 山青果・長谷川伸らの作 者による「新歌舞伎」が、 近代的な演技・演出法に 基づいて上演。 そして、大正から昭和初 期にかけては二代目市川 左團次がヨーロッパ留学 で得た技術や知識に基づ いて新歌舞伎を盛んに上 演すると共に、古劇の復 活にも貢献。 戦時下においては言論・ 出版・文化の検閲・統制 があり、芸能も劇場閉鎖 や演目制限など受難の時 代だった。	明治中期の日清・日露 戦争から全世界的規模 となった第二次世界大 戦の終戦の昭和 25 年ま での 50 年間は、対外戦 争の連続の時代。 敗戦諸国の中でも日本 が受けた原子爆弾の投 下による被害は空前絶 後。 長く続いた戦争で、生 活必需品を自由に手に 入れられない状況とな り、政府からの配給も 十分ではなく、「ぜいた くは敵だ」というスロ ーガンで不自由な生活 に耐えた。	* 落語—明治 30 年 代には、滑稽噺が寄 席の主流となるが、 本格的な話芸の継承 を図る落語研究会も 発足。 大正 14 年に五代目 圓生が襲名。 * 講談—明治中期に は、口演の速記が新 聞に連載され、単行 本に、その後少年向 けの「立川文庫」が 人気。三代目神田伯 山、初代伊藤痴遊が 名人上手と言われ た。
十一代目團十郎 明治 42(1909)~ 昭和 40(1965) 年 七代目松本幸四 郎の長男で十代 目の養子。 1962 年襲名	品格ある風姿、華 のある芸風、高低 問わずよく響く美 声などを売り物と した、戦後歌舞伎 を代表する花形役 者の一人。「花の海 老蔵」として空前 のブームも。 十一代目の襲名 で、九代目の没後 五十九年ぶりに團 十郎が復活した。	第二次世界大戦後間もな くして歌舞伎は再開す るが、歌舞伎の作品が反民 主主義的と上演が禁止さ れ、存亡の危機に直面。 昭和 22 年に上演が許可、 26 年に歌舞伎座が再建 され、歌舞伎は復興へ。 昭和 37 年には、60 年も 途絶えていた市川團十郎 の名跡が復活、十一代目 團十郎の襲名披露公演は 大変な人気をよび、歌舞 伎ブームに。	敗戦により焼け野原と なった日本は、激しい インフレに見舞われな がらも逞しく復興し、 10 年ほどで戦前の経済 規模にまで回復し、そ の後高度成長へと突 入。 三種の神器と言われた 家電製品「白黒テレビ・ 洗濯機・冷蔵庫」が生ま れ、ラジオやテレビが 普及し、文化が「大衆 化」の時代へ。	* 落語—戦後、民間 ラジオ局とテレビの 開局により落語ブー ムが到来。八代目桂 文楽、五代目古今亭 志ん生、六代目三遊 亭円生ら大御所と三 代目古今亭志ん朝、 五代目立川談志、五 代目三遊亭円楽ら若 手が本格派が活躍。 三平、歌奴、圓鏡ら がテレビの人気者 に。
十二代目團十郎 昭和 21(1946)~ 平成 25(2013) 1985 年襲名	『勸進帳』の弁慶 でのカッと眼をむ く力強い演技にみ られるスケールの 大きい骨太な芸格 が魅力。 團十郎襲名披露で は『助六』『勸進帳』 「暫』『鳴神』など、	昭和 58 年に六代目新之 助を襲名と同世代の尾上 菊之助、初代辰之助とと もに「三之助ブーム」。 昭和 60 年、日本最古の芝 居小屋金丸座(香川県琴 平町)での公演と十二代 目團十郎襲名披露興行。 初めて海外でも公演。	戦後高度成長を成し遂 げた日本経済は、二度 のオイルショックを契 機に安定成長期を迎 え、そしてバブル景気 に突入した。 新元号平成に変わった 1989 年当時は、バブル 景気の絶頂期。	* 落語—大衆の嗜好 の多様化により、落 語家や落語がテレビ に登場する機会が極 端に減少した。 そんな環境下、笑点 が長寿番組として落 語家の人気の支え、 近年では古典や新作

	家の芸である荒事を中心に演じた。2004年に白血病を発症したが、厳しい治療を乗り越えて復帰し、07年にパリオペラ座での初めての歌舞伎公演を長男の海老蔵と共に成功。	三代目市川猿之助が、最新の「スーパー歌舞伎」の『ヤマトタケル』を上演。平成に入り、現代劇の作家や演出家との連携による新作の上演、歌舞伎専用の劇場以外での公演など従来の枠組みを超えた取り組みによる顧客層の拡大へ。	その後バブルの崩壊、そして長期間のデフレ不況に喘ぐ中、阪神大震災や東日本大震災をはじめとする災害が直撃した。1990年代後半に登場したインターネットの普及により、経済のグローバル化の進展と呼応して、リアルタイムに情報を収集・発信する新しい時代が到来した。	を演じる若手の落語家の台頭により、落語の人気復活。素人の落語教室ブーム到来。 * 講談一五代目一龍齋貞丈と五代目宝井馬琴の二大看板で支えてきた講談界も講談師の減少で危機に直面。近年神田紅らにより女流講談ブームが訪れた。
十三代目團十郎を十一代目市川海老蔵が、2020年に襲名！ 十二代目團十郎の長男	海外公演や映画・舞台・テレビにも多数出演するなどマルチで活躍。現代歌舞伎を担う若手スターとして大きな期待！	400年にわたる長い伝統を持つ歌舞伎界は、若手台頭の時節の新風と歌舞伎座再開で人気上昇中！十三代目團十郎襲名決定！舞台は整った。	2019年5月1日に「平成」から新元号「令和」に改元。 2020年、東京オリンピック・パラリンピック開催！	落語界、講談界ともに演者が増えてきており、魅力的な若手も台頭、今後に期待！

七代目團十郎が「市川流」の「歌舞伎狂言組十八番」の制定を公表したのは、天保3(1832)年息子海老蔵に八代目團十郎を襲名させて、自分は海老蔵と改名した時のことでした。

歌舞伎十八番の内『勸進帳』だけが、従来の勸進帳ではなく、能を歌舞伎化した新作であるが、その理由は？ 演劇評論家の赤坂治績氏によると、七代目團十郎の個性に起因していると言う。その理由として、

- ①研究癖を指摘。初代の『星合十二段』は能『安宅』を下敷きにしていた点に七代目が気付いたのだろうと。
- ②高尚嗜好を指摘。七代目は能に憧れていたと。
- ③七代目の性格を指摘。よく言えば豪放磊落、悪く言えば傲岸不遜の性格。能役者・狂言役者の身分は武士に準ずるもので、一方歌舞伎役者は人外者の身分に置かれ差別されていた。七代目のような傲岸不遜でない、能を直接的に歌舞伎化することは考えなかったのではないかと。

七代目團十郎によって、庶民には縁遠い能の『安宅』が歌舞伎化された新作『勸進帳』は、一般庶民にも親しまれ、現在では現代歌舞伎作品の中でも一番の人気として多くの顧客層に支持されている。

また、十八の歌舞伎作品につけた番は、能では作品数を数える時の「番」からヒントを得た。

そういう訳で新作『勸進帳』が人気を博したのだが、なんと天保の改革で七代目は江戸から追放という憂き目にあう。

その理由であるが、

- ①贅沢な生活をしているから。当時、歌舞伎の大物はすべて豪華な舞台衣装や小道具を使っていた。観客である一般庶民は、そうした豪華な衣装や小道具に憧れ、それを求めていた。詰まる所、団十郎は江戸を代表する役者だった為、見せしめで追放されたのだ。
- ②もうひとつは、武士の芸能である能の「安宅」を歌舞伎化した『勸進帳』の公演は奉行所を刺激したから。

正に七代目は、幕末という大きな時代の転換期の中で、波乱万丈の人生を送ったと言える。

初代



二代目



三代目



四代目



五代目



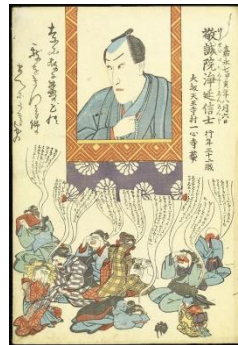
六代目



七代目



八代目



九代目



十代目



十一代目



十二代目



### 参考文献

- ・「團十郎とは何者か 歌舞伎トップブランドのひみつ」赤坂治績 朝日新書
- ・「市川團十郎代々」服部幸雄 講談社
- ・「團十郎の歌舞伎案内」十二代目市川團十郎 PHP 研究所
- ・「日本の伝統文化・芸能事典」日本文化いろは事典プロジェクトスタッフ 汐文社
- ・「日本の伝統芸能」日本放送協会 日本放送出版協会
- ・「浮世絵の歴史 美人絵・役者絵の世界」山口桂三郎 講談社学術文庫